五世紀末における鉄製工具の画期と新原・奴山古墳群

魚津　知克

はじめに

以前、筆者は、「海を舞台とした人間活動と深い関連をもつ脈絡により、海の近くに築造された古墳」を「海の古墳」とみなした（魚津二〇一七）。その中で、「海を舞台とした人間活動」を、次の四つに区分した。

（1）海・海産物を資源として利用する、生業活動もしくは生産活動。例えば、漁撈や製塩。

（2）海上で繰り広げられた、人・もの・情報のやりとり。すなわち、海上交通や海上交易。

（3）列島各地の海域で、あるいは列島をこえて渡海する形で実行される外交・軍事活動。

（4）列島の範囲外から列島各地への海を越えた移住。

福岡県福津市に所在する新原・奴山古墳群は、まさにこの四つと深い関連を有しつつ、海に面する地域首長墓群として中期前半に築造が開始された。中期後半から後期に至っては、津屋崎古墳群としてさらに大規模となり、近畿中央部政権と連携しつつ倭王権の一翼を担ったことが予測される。

本誌、『沖ノ島研究』の題名が示すように、世界遺産「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の中核となっているのは、沖ノ島の祭祀遺跡群である。倭王権の統治理念の一つである「山海の政」（森田二〇〇九）の根幹を形成する祭祀が、古墳時代から古代にかけて実修されたことを示す遺跡群であり、列島全体、ひいては世界史的視野で理解すべき器物が数多く見いだされるのは、改めて述べるまでもない。一方で、沖ノ島祭祀をめぐっては、中央と地方という祭祀主体の二元性が指摘されている（井上一九八四）。その意味で、新原・奴山古墳群は、この世界遺産の理解に必要不可欠な構成資産だと言える。

以上のように位置づけられる新原・奴山古墳群について、考古資料を用いて、さらに具体的に検討するのが、本稿の趣旨である。用いる考古資料としては、副葬された鉄製農具・工具・漁具、とりわけ鉄製工具に焦点を当てる。鉄製工具は、生産活動の基軸となる生産手段であり、地域社会さらには首長層の動向を規定すると言っても過言ではない。「海の古墳」の築造に至った生産基盤の在り方について考察するには、欠かせない考古資料と言えるだろう。

筆者としても、かねてより、各地域における「海の古墳」の築造契機を実証的に提示していく必要性を認識していた。しかしながら、概念構築ばかりが先行し、具体的な資料分析は後回しとなってきた。この点を反省し、本稿において、研究上の責務を少しでも果たしていきたい。

本稿の構成としては、最初に、古墳時代の鉄製工具を対象としたこれまでの研究で、工具編成がどのように理解されてきたのかを概観する。つづいて、古墳時代中期から後期にかけての鉄製工具編成の画期を示す。そして、鉄製工具の推移において新原・奴山古墳群副葬例が占める位置を、「海の古墳」としての性格も踏まえつつ考察する。

一、古墳時代鉄製工具研究史における工具編成の理解

まず、古墳時代における鉄製工具様式についての研究史を概観していきたい。より広範な、鉄製工具資料に対する認識を含めた推移については、拙稿（魚津二〇二一ａ）も併せて参考にされたい。

戦後、栃木県那珂川町那須八幡塚古墳（三木・村井一九五七）、大阪府和泉市和泉黄金塚古墳（末永・島田・森一九五四）、岡山県岡山市金蔵山古墳（西谷・鎌木一九五九）において埋葬主体部の発掘調査が実施され、列島各地の首長墓に副葬された各種生産用具の実態が明らかになった。

新資料に立脚しつつ、一九五〇年代末には西谷眞治の論考（西谷　一九五九）が発表された。ここでは、「生産具あるいは建築や日常生活に必要な器物をつくりだすための道具」（前掲書　五八頁）として工具が位置づけられ、木工具として斧、鋸、鉋、鑿などが、金工具として鎚、鉗、鉄床【註1】などが挙げられた。そして、木工具を中心に、諸型式の推移が簡潔かつ的確に示される。六五年近く前の、主に古墳時代社会における生産力を論じた内容であるが、現在の水準からみても、資料分析の大枠にはほとんど変更がないことに驚かされる。

つづいて、一九七〇年代に研究の大きな進展がみられた。大阪府藤井寺市野中古墳（北野編一九七六）や奈良県桜井市メスリ山古墳（伊達編一九七七）などで、多種多様な鉄製工具副葬例が報告され、基礎資料が充実したことが、その背景として挙げられる。増加した資料に立脚しつつ、古瀬清秀が短冊形斧（古瀬一九七四）、鉋（古瀬一九七七）の研究を相次いで発表し、古墳時代における各種鉄製工具の型式分類や編年がより詳細に提示された。そして、後続する一九八〇～一九九〇年代においても、個別品目研究が大きく進展した。

その中で、工具編成の理解に大きく寄与したのが、一九九〇年代の初めに古瀬清秀が発表した論考（古瀬一九九一）である。古墳時代における工具の画期は「四世紀後葉から五世紀前半にかけて」であり、「大型製材用工具の出現と、鑿・鋸など小型加工具の機能分化と著しい量的増加は、工具全般の発展過程において、極めて大きな画期となった。」（前掲書　八八頁）と評価されている。古瀬が設定した古墳時代工具の画期はこの一つのみだが、後期に入って工具に「大いなる質的変容がなされたことは十分に想像でき、今日に続く木工具の祖型がほぼ完成した。」（同　八九頁）と述べている。

二〇〇〇年以降においても、研究はさらに深化している。なかでも、近年発表された平井洸史による様式的把握（平井二〇二一）は、本稿の主題に深く関連する。平井は、地域的動向の把握と地域間比較を通じた、工具生産・流通の解明をめざす（前掲書四六頁）。ここで、「造り」という製作技術上の概念を、平井は強調する。「造り」の差については、着柄法と着柄部形態とで認識する（同四七頁）。すなわち、平井の立場は、工具の製作にあたり、鉄製部分と木・骨角などそれ以外の部分とを組み合わせ、道具として完成させる局面が、様式の把握に決定的な要素となるというものである。筆者も、鉄製農具・工具の研究史を示す中で、素材をこえた横断的な分析を強調したことがあり（魚津二〇二一ａ）、道具の全体形状を重視する平井論考の視点は、大きな意義を持つもので、高く評価される。

ただし一方で、工具の「道具立て」を総合的に把握し、生活技術の解明へとつなげていく（山田二〇一二）という、使用技術に立脚した観点も、道具様式についての考古学的分析には欠かせない。個々の道具について、全形復元も視野に入れつつ分析した後、他の道具とどのように組み合わせて使っているのか。鉄製農具・工具研究を標榜してきた筆者が今一度掘り下げる必要があろう。本稿では、この点を再検討していきたい。

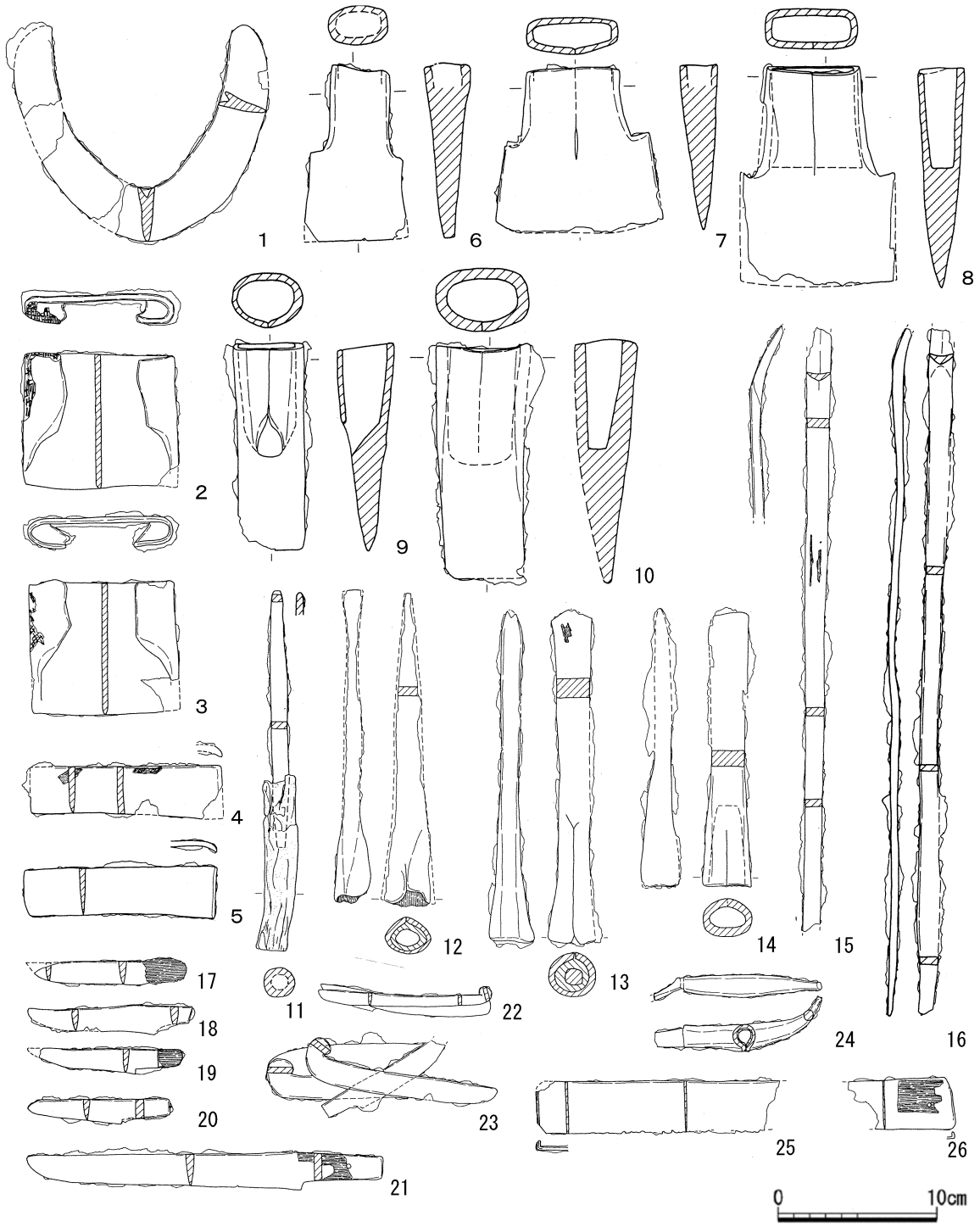
二、古墳時代中期から後期にかけての鉄製農具・工具の型式編成―新原・奴山古墳群の資料を中心に―

古墳時代中期から後期にかけて、工具の「道具立て」を考えるにあたり、北部九州の古墳、なかでも新原・奴山古墳群の副葬品には、良好なセット関係を構成する類例が多く認められる。本章では、これらの副葬例について、筆者による副葬農具・工具様式案（魚津二〇二〇・二〇二三）に対応させつつ示す。紙幅の都合上、各型式・様式の要件は上記拙稿をご参照頂きたい。ただし、時期の表示については、従来は小文字のローマ数字を使用していたが、不要に煩雑であり、今後は、アラビア数字を用いることとする。本稿に関連するのは、６期から10期である。以下、概要を示す。

福岡県福岡市老司古墳三号石室副葬例（６期）（山口・吉留・渡辺編一九八九）

農具は、Ｕ字形鍬鋤先Ⅰ群１型ａ類（第１図１）、方形鍬鋤先Ⅱ群１型ｂ１類（第１図２・３）、直刃鎌Ⅰ組Ａ型１類（第１図４・５）で構成される。このうち、Ｕ字形鍬鋤先は早い時期の副葬例である。

工具は、有袋斧のうちⅣ群（有肩）が目立つ。ⅣＡ群４系２型Ｅ２式（第１図６）、ⅣＢ群４系２型Ｓ式（第１図７・８）である。これにⅠ群（無肩）の３系２型Ｅ１式（第１図９）及び４系２型Ｅ２式（第１図10）が加わる。この時期の鑿は有茎鑿（第１図11）が主体だが、本例では有袋鑿が目立つ。Ⅱ群３系１型（第１図12・13）、Ⅱ群４系１型（第１図14）で構成される。刀子は、茎刀子Ⅱ群２型ａ類（第１図17・20・21）、同ｃ類（第１図18・19）に加え、鉄柄刀子Ⅰ群２型ｂ類（第１図24）及びⅠ群３型（第１図22・23）が加わるのが大きな特徴である。これに、身が幅広の鉇Ⅰ群１型（第１図15・16）、破片であるため確定しないが、Ⅰ群と考えられる

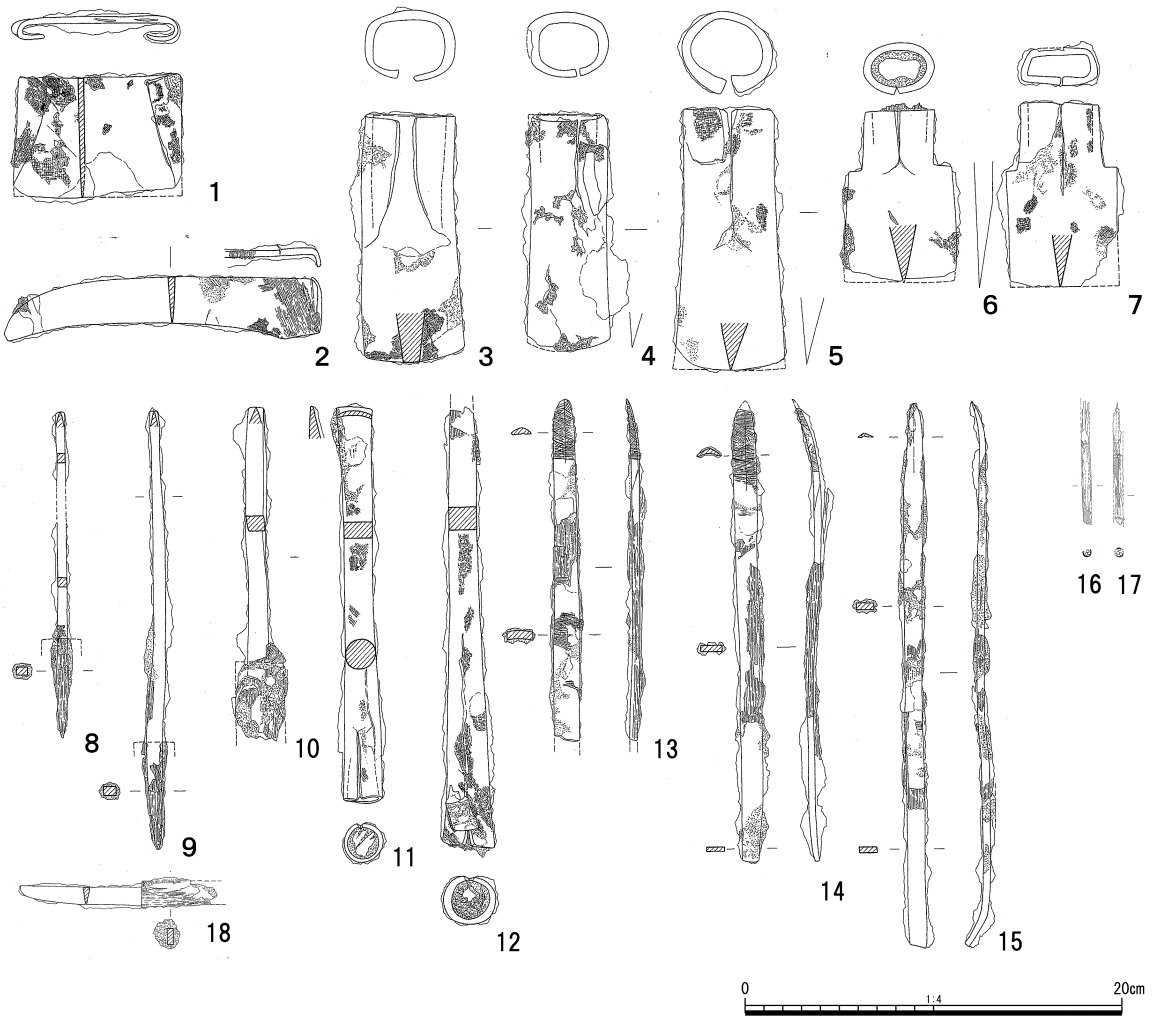


第１図　老司古墳３号石室副葬例（1/4）（山口・吉留・渡辺編 1989）

無茎鋸（第１図25・26）が共伴している。

福岡県福津市奴山正園古墳副葬例（７期）（佐々木編二〇一三）

農具は、方形鍬鋤先Ⅱ群１型ｂ１類（第２図１）、曲刃鎌Ⅰ組Ｂ型１類（第２図２）で構成される。７期は、大阪府藤井寺市アリ山古墳（北野一九六四）、静岡県磐田市堂山古墳前方部埴輪棺（原編 一九九五）のように、本格的に曲刃鎌が副葬される時期であるが、該期の多くの類例は、先端付近で急速に湾曲するＡ・ａ型であり、Ｂ・ｂ型は後の時期に一般化する。その点で、奴山正園



第２図　奴山正園古墳副葬例（1/4）（佐々木編 2013）

古墳副葬例は先進的だと言える。

工具は、老司古墳と同様に、有袋斧においてⅣ群（有肩）が認められるが（第2図6・7）、袋部より身部が長い3型に形態が変化している。その他、鑿は有茎鑿Ⅰ群1型（第2図8～10）、有袋鑿Ⅰ群4型1類（第2図11・12）、茎刀子Ⅱ群1型A類（第2図18）、鉇Ⅰ群1型2類（第2図14・15）、針（第2図16・17）で構成される。有袋鑿が目立つ点は、老司古墳三号石室副葬例と共通する。

福岡県福津市新原・奴山一号墳副葬例（8期から9期【註2】）

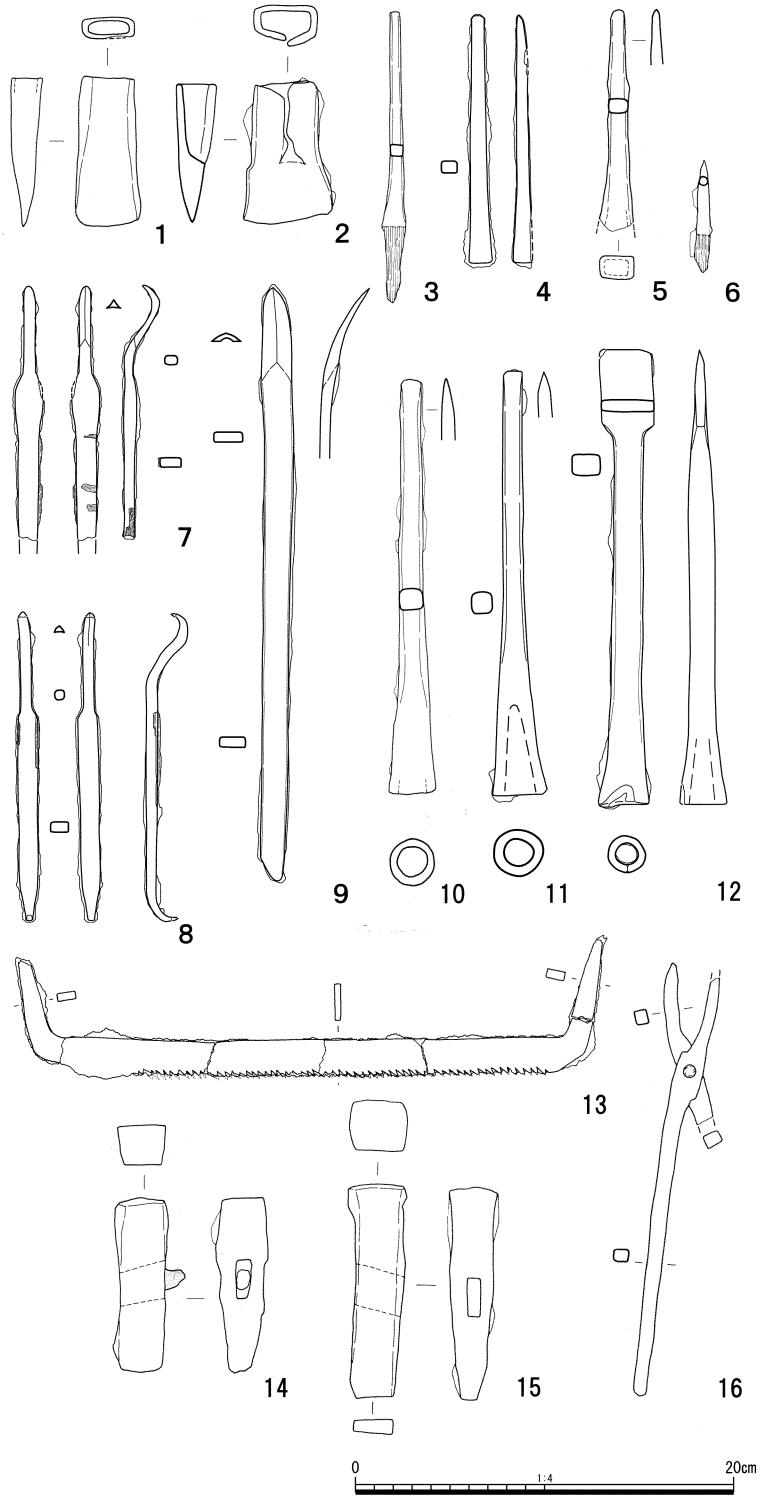
（橋口編一九八九）

8期の兵庫県姫路市姫路宮山古墳第三主体（松本・加藤一九七三）、9期の岡山県笠岡市長福寺裏山一号（東塚）古墳（鎌木ほか一九六五）といった基準資料のように、U字形鍬鋤先（Ⅰ群1・2型）や細長あるいは鳥首状の曲刃鎌（Ⅰ組B・C型、Ⅱ組b型）が列島の広範囲で副葬される時期だが、新原・奴山古墳群における農具副葬は、次章で述べるように低調である。一方、工具は奴山一号墳で横穴式石室羨道部分から良好なセットが出土した（第3・4図）。

斧は、有袋Ⅰ群（無肩）4系2型S式（第3図1）・Ⅱ群（なで肩）3系3型H式であり、張り出しの強い有肩式を欠く。鑿は、有茎鑿Ⅰ群（第3図3）も存在するが、注目されるのは、

有袋鑿Ⅰ群4系3式という有肩の有茎鑿（第3図12）が認められる点である。同時に、身部断面が正方形に近い、引き締まった形態の無肩有袋鑿（Ⅰ群4系1型：第3図10・11）が存在する。穿孔性能の高い型式の鑿で構成されていると言えよう。

さらに、比較的身部が長い鉤状鉇（第5図7・8）、特殊な形態の無茎鋸（13）、そして鎚（14・15）と鉗（16）が共伴する。



第３図　奴山１号墳副葬例（1/4）

福岡県飯塚市櫨山古墳副葬例（10期）（嶋田一九九一）

農具は、U字形鍬鋤先Ⅰ群2型b類（第5図1）、曲刃鎌Ⅰ組B型1類乙式（第5図2）・Ⅱ組c型2類（第5図6）で構成される。このうち、曲刃鎌Ⅱ組c型は、身部が鳥首状を呈し基端を斜めに折り返すため、柄を付けると鉈状になる。鳥首状身部の曲刃鎌は、多くが基端全辺を折り返すため身と直角に着柄されるⅠ組C型なので、本例は該期の特徴を示す可能性がある。

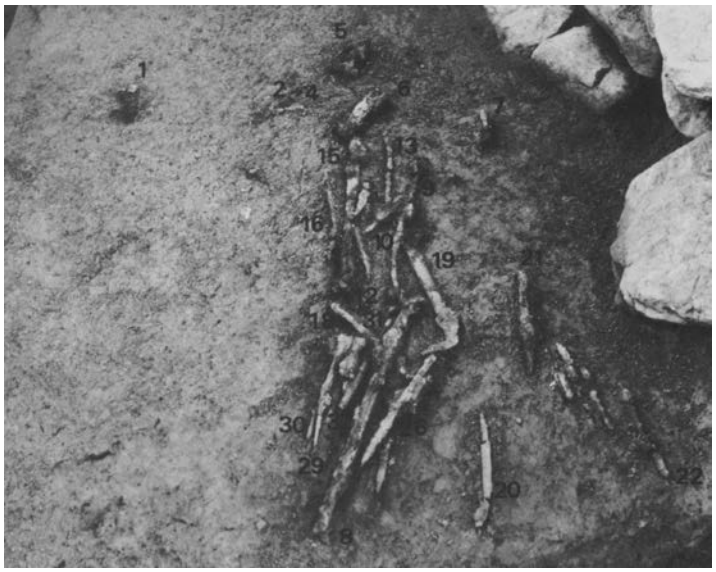
工具では、鉇Ⅲ群の出現がこの時期の大きな特徴である。本例では、Ⅲ群2型（第5図13・14）が副葬されている。斧は、小ぶりのⅠ群（無肩）4型2類E2式（第5図9）とⅣA群（有肩）4系3型E2式（第5図8）、中型のⅣA群（有肩）4系2型E2式（第5図7）、大型のⅡ群（なで肩）3系2

型Ｅ１式（第５図10）で構成される。肩の張り具合（群別）が、法量の大小に対応する類例として注目される。また、有茎鑿Ⅰ群１型（第５図11・12）及び鹿角装茎刀子Ⅱ群４型ａ類（第５図15）が共伴している。

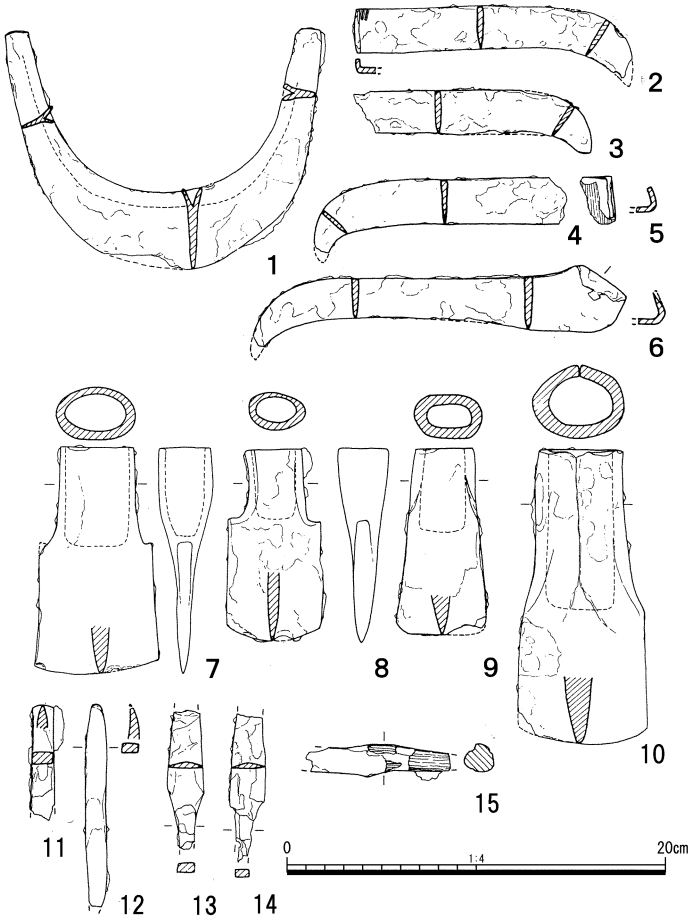
福岡県福津市新原・奴山四四号墳副葬例（11期から12期）（池ノ上編二〇〇一）

農具は出土していない。この背景として、12期以降の鉄製農工具副葬例が地域によっては減少傾向にある（魚津二〇二三）点も考えられる。また、横穴式石室の奥室が盗掘を受けており、本来の組成が一部欠けている可能性も捨てきれない。

以上のように留意すべき点が残るものの、工具の種類は豊富である。副葬数が比較的少数の斧及び鑿は、前者が有袋斧Ⅱ群３系２型Ｅ２式（第６図１）、後者は有茎鑿Ⅰ群１型（第６図２）である。一方、鉇の副葬数は多く、Ⅰ群１型（第６図７）、特殊なⅠ群２型（第６図４・５）、Ⅱ群【註３】２型（第６図８）、鉤状鉇（第６図６）という幅広い構成で、かつ多くが鹿角柄である。そして、茎刀子Ⅲ群４型Ａ類（第６図10・11）、有茎鋸Ⅰ群（第６図13）、



第４図　奴山１号墳　副葬工具出土状況
（橋口編 1989）



第５図　櫨山古墳副葬例（1/4）（嶋田 1991）

凹形大型刃器（第６図12）が加わる。

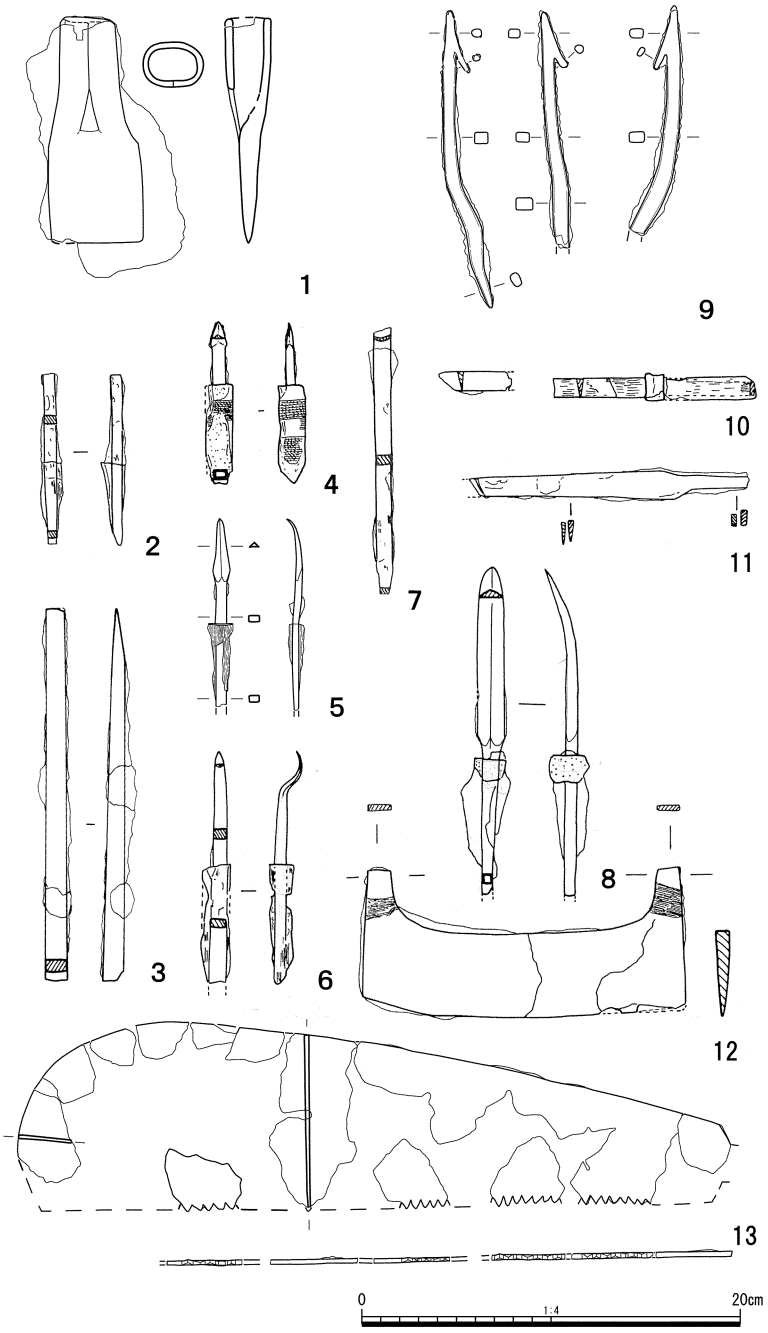
また、漁具として、筆者分類（魚津二〇一八）の刺突具Ⅱ群２型（第６図９）が共伴する。中期中頃までの首長墓にしばしば見いだせる刺突具の副葬は、後期古墳においては一挙に減少する傾向にある。その中で、本例は注目される。

三、鉄製工具の画期と新原・奴山古墳群

ここまで、古墳時代中期から後期にかけての、鉄製工具の「道具立て」を示した。その内容を検討すると、９期から10期、おおよそ五世紀の末を前後する時期において、鉄製工具の画期というべき、型式構成の大きな変化が生じたと見なすことができる【註４】。具体的な変化内容は、以下の通りである。

（一）鉇Ⅱ群（短茎鉇）の出現

まず挙げられるのが、筆者が鉇Ⅱ群とする、短茎を持つ鉇の出現である。日本列島において、鉇に系統がつながる鉄製工具は、弥生時代中期前半の石川県小松市八日市地方遺跡出土品（第７図：中屋ほか二〇一九）まで遡ることができる。本例は木柄も完存しており、明確なグリップエンドを有する形態から、両手で



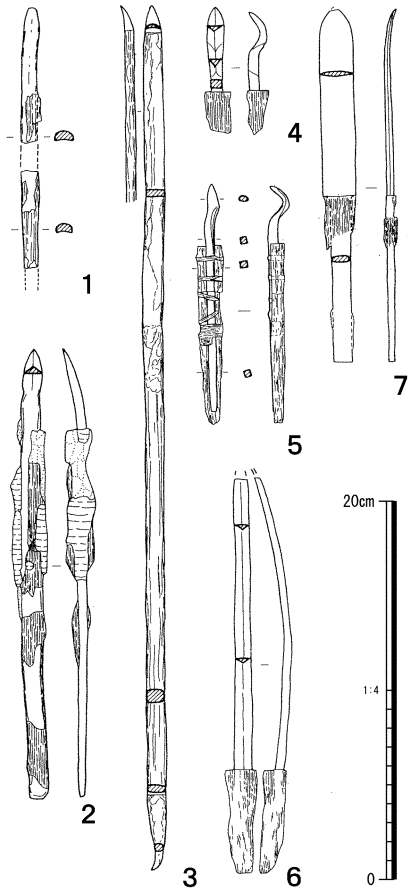
第６図　奴山44号墳副葬例（1/4）

把持して押し出すように用いる動作が復元できる。比較的硬質の木製容器などの主に曲面を対象に、突き出すような動作で刳り調整するのに用いられたのであろう（樋上・田中・鶴来二〇一八）。これが、弥生時代後期に入ると、筆者が鉇Ⅰ群とする、長身の形態へと変化する。身の断面形は、U字形・長方形など地域差をもって推移する（野島二〇〇九）ものの、刃が柳葉形となる点は共通する。両手で保持しつつ横方向に刃を動かすような使用動作に変化したことが推測される。田中謙が示すように、刃部の反り具合に応じて様々な木器加工に利用されたと考えられる（田中二〇一七）。刃部長から考えて、対象は小型から中型の木器が中心であったと考えられる。

鉇Ⅰ群は、古墳時代前期から中期にも継続し、多くの副葬例が認められる（第8図1～3）。身部は長さ四〇センチメートルをこえる副葬例（第1図16、第8図3）が、3期から6期にしばしば認められるものの、前期の「削り小刀」（第8図7）や中期の著しく長刃の鉇（第8図6）といった特殊な一群を除き、刃部は五センチメートルをこえることはない。著しく長身の類例では、台を片手で握り、台からはみ出した身下部（基部）に片手を添え、かなり刃先に力がかかる動作で仕上げ調整をおこなったことが推測される。

9期から10期を境に、鉇Ⅰ群の副葬例は比較的少数となり、短茎で幅広の刃を持つ鉇Ⅱ群の副葬例（第5図13・14、第9図1・2）が列島の広域で認められるようになる。そして、つづく11期から12期には、長茎かつ長刃の鉇Ⅲ群（第9図3）が西日本の広域で認められる。先述の八日市地方遺跡出土品が、もともとは中国大陸の「削刀」に起源をもつ工具として日本列島に導入された後、鉇という種類自体が列島独自に発展する。鉇Ⅱ群

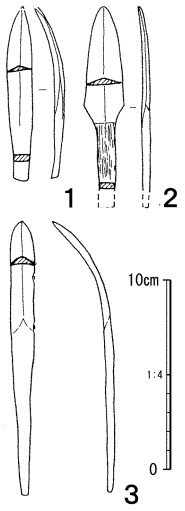
第７図　八日市地方遺跡出土例
（中屋ほか 2019）



第８図　９期までの鉇副葬例 (1/4)
１石川県加賀市分校マエ山（カン山）１号墳　２京都府宇治市宇治二子山北墳南槨　３大阪府富田林市真名井古墳　４岡山県岡山市神宮寺山古墳　５大阪府和泉市和泉黄金塚古墳　６岡山県総社市随庵古墳　７栃木県那珂川町那須八幡塚古墳

の出現は、日本列島内での型式変化であると考えられる。

古代からの伝世品である正倉院宝物例（帝室博物館一九四四：第四十図）は、鉇Ⅱ群の系譜に連なると考えられ、木柄の長さはおよそ一三～二五センチメートルを測る。ここから、鉇Ⅱ群の使用動作は、両手で柄を保持し横方向に刃を動かすという点では、鉇Ⅰ群の使用動作と同じだったと考えられる。しかし、鉇Ⅰ群では貫通する鉄身が動作の軸であり木製台は当て具であるのに対し、鉇Ⅱ群・Ⅲ群では木製柄の小口に鉄刃の茎を挿入するものである。とりわけ、短茎の鉇Ⅱ群は、Ⅰ群のように刃先に力をかければ、柄が折れてしまうのが容易に想像できる。鉇Ⅱ群は、鋭利に研がれた刃による、平滑かつ薄いカンナ調整を目指した形態であり、対象物としては建築材あるいは船材【註5】がふさわしいと考えられる。9期から10期の鉇の形態変化は、木工技術の画期的な転換として位置づけられる。



第９図　10期以降の鉇副葬例（1/4）

１奈良県二塚古墳　２群馬県伊勢崎市恵下古墳
３愛媛県松山市東山鳶が森４号墳

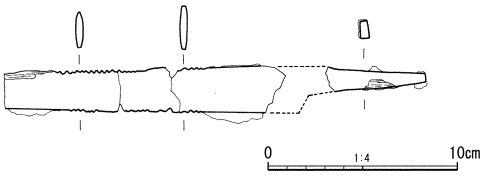
（二）有茎鋸の導入

また、有茎鋸の導入も、9期から10期にかけての鉄製工具の画期を構成する大きな変化として指摘できる。

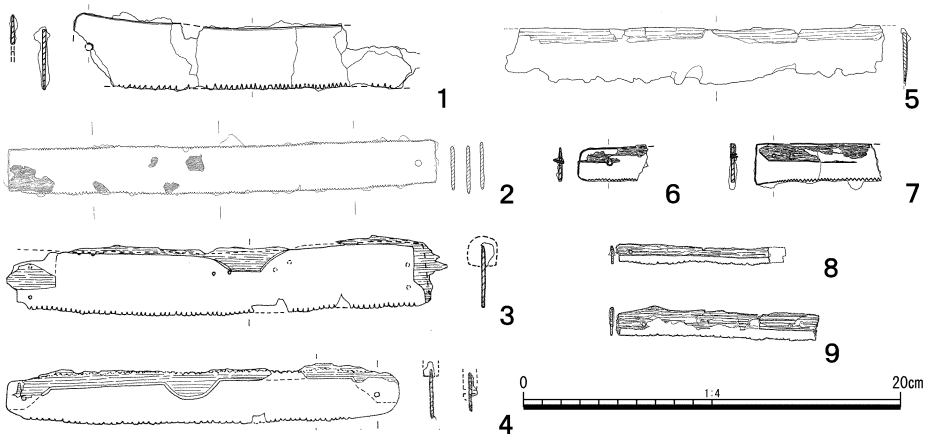
日本列島における最古の鋸副葬例は、現在のところ、前期前葉（2期）の権現山五一号墳（第11図2：近藤編一九九一）である。本例は、薄手の長方形鉄板の両側を穿孔し柄を取り付ける、無茎鋸である。その全形について、伊藤実は、「両端に木栓のようなものをつけて、これをH形に組んだ木枠に装着し、鋸身とは反対側に取り付けた縄を振って鋸身を緊張させた枠付鋸のようなもの」を想定している（伊藤一九九三：五四九頁）。

無茎鋸は、大ぶりな施溝・枘挽鋸（全長二〇～三〇センチメートル、幅三～四センチメートル程度：筆者分類Ⅰ群）と、小ぶりな細工鋸（全長一二センチメートル前後、幅一・五～二・五センチメートル程度：筆者分類Ⅱ群）との二群が併存しつつ（魚津二〇一五）、前期から中期の古墳に副葬される（伊藤前掲書、丹下一九九五）。

ただし、7期以降、特殊な形態を有する鋸が出現する。7期もしくは8期には、京都府南丹市岸ヶ前二号墳埋葬施設三において、両歯で片方に茎状突起を有する形態の鋸が副葬される（第10図：門田編二〇〇一）。有茎鋸の初現例とも捉えられるのだが、茎状突起は図面上側の歯に著しく偏ってい

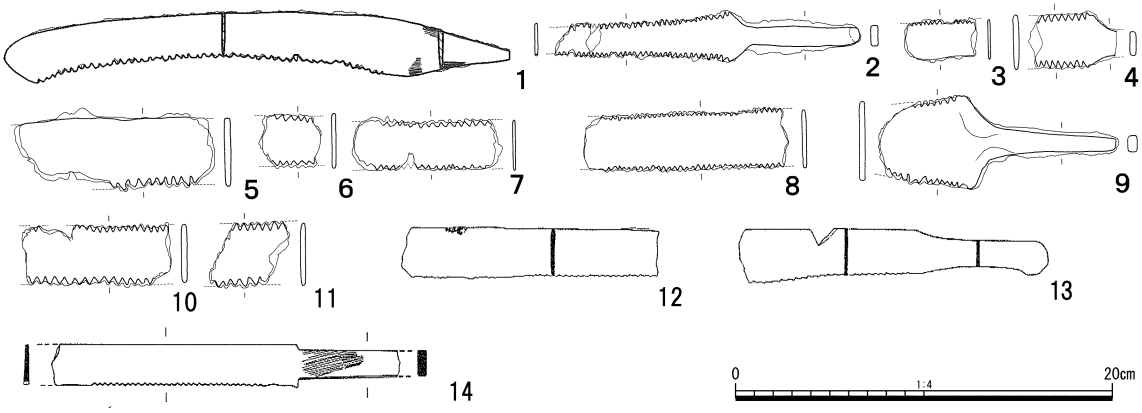


第10図 岸ヶ前２号墳副葬鋸（門田編 2001）



第 11 図　無茎鋸の副葬例（1/4）

１・６～７：奈良県五條市五條猫塚古墳　２：兵庫県たつの市権現山 51 号墳　３：兵庫県加古川市行者塚古墳　４：千葉県市原市草刈１号墳　５：兵庫県篠山市ずえが谷１号墳　８～９：大阪府藤井寺市アリ山古墳



第 12 図　有茎鋸の副葬例（1/4）

１福岡県飯塚市小正西古墳　２福岡県宗像市城ヶ谷２号墳　３～４福岡県宗像市大井三倉２号墳　５福岡県宗像市朝町百田Ｂ－２号墳　６～７福岡県宗像市須恵クヒの浦古墳　８福岡県宗像市大井三倉３号墳　９福岡県宗像市大井三倉５号墳　10 ～ 11 福岡県宗像市城ヶ谷 56 号墳　12 ～ 13 兵庫県尼崎市園田大塚山古墳　14 奈良県生駒郡平群町烏土塚古墳

る。後の有茎鋸のように一方のみに柄をつけて前後に挽くには、いさかか無理があり、茎状突起も幅が狭く不安定である。図面左側の先端も欠けているとするならば、こちらにも茎状突起を復元する余地があり、身部に平行して柄が付く一種の枠付鋸、もしくは両柄鋸である可能性も残る。本例の位置づけについては、詳細な観察を踏まえた関連資料との比較も必要であり、本稿では保留しておきたい。

前章にて示したように、つづく8期から9期にかけて、奴山一号墳に、両側にL字状の腕部を有する特殊な形態の無茎鋸（第3図13）が副葬される。腕がはね上がる形態から、枠付鋸もしくは両柄鋸だと考えられるものの、岸ヶ前二号墳例も含め、その系譜ははっきりしない。管見ながら、腕を有する鋸は朝鮮半島に類例が見出せず、その点では、鉇同様に列島内での形態変化の結果である可能性も捨てきれない。すくなくとも、有腕という形態は、切削長に加えて切削深度を確保する意図があるのは間違

いなかろう。

後続して有茎鋸の副葬が開始される。代表的な10期の副葬例として、福岡県飯塚市小正西古墳副葬例（第12図1）や兵庫県尼崎市園田大塚山古墳副葬例（第12図12・13）が挙げられる。初期の類例は、斜関があまり明確でないようである。柄が身と一直線に接続する有茎鋸の登場によって、鋸の切削深度は飛躍的に向上した。さらには、切削ではなく、切断に用いられる局面が増加したと考えられる。無茎鋸から有茎鋸への変化は、鉇Ⅱ群の出現と同様に、この時期に建築材あるいは船材の精密な製材【註6】が大きな焦点となった結果であると想定できる。

さらに、宗像地域においては11期から12期においても、多くの有茎鋸が副葬される。その類例としては、宗像市須恵クヒの浦古墳（第11図6・7）といった地域首長墳としての前方後円墳や、地域首長墳と同一墓域の横穴式石室墳である新原・奴山四四号墳（第6図13）だけでなく、城ヶ谷古墳群（第12図2、10・11）や大井三倉古墳群（第12図3・4、8・9）のように、群集墳ごとに複数が認められる。阿南翔悟が指摘しているように、鍛冶・木工に関連する工人集団と深く関連しつつ、宗像地域における有茎鋸の副葬が継続したのであろう（阿南二〇一三）。前期から中期にかけての無茎鋸の副葬が首長墳中心であったのと比べると、群集墳における有茎鋸の継続副葬は大きな意義を持つ。

以上のように、新原・奴山古墳群副葬品が先駆となった鋸の形態変化は、鉄製工具の画期の一翼を担うものであり、広域に及ぶ手工業生産体制の編成と表裏一体のものであったと位置づけられる。

四、結論
―新原・奴山古墳群における鉄製工具副葬の意義―

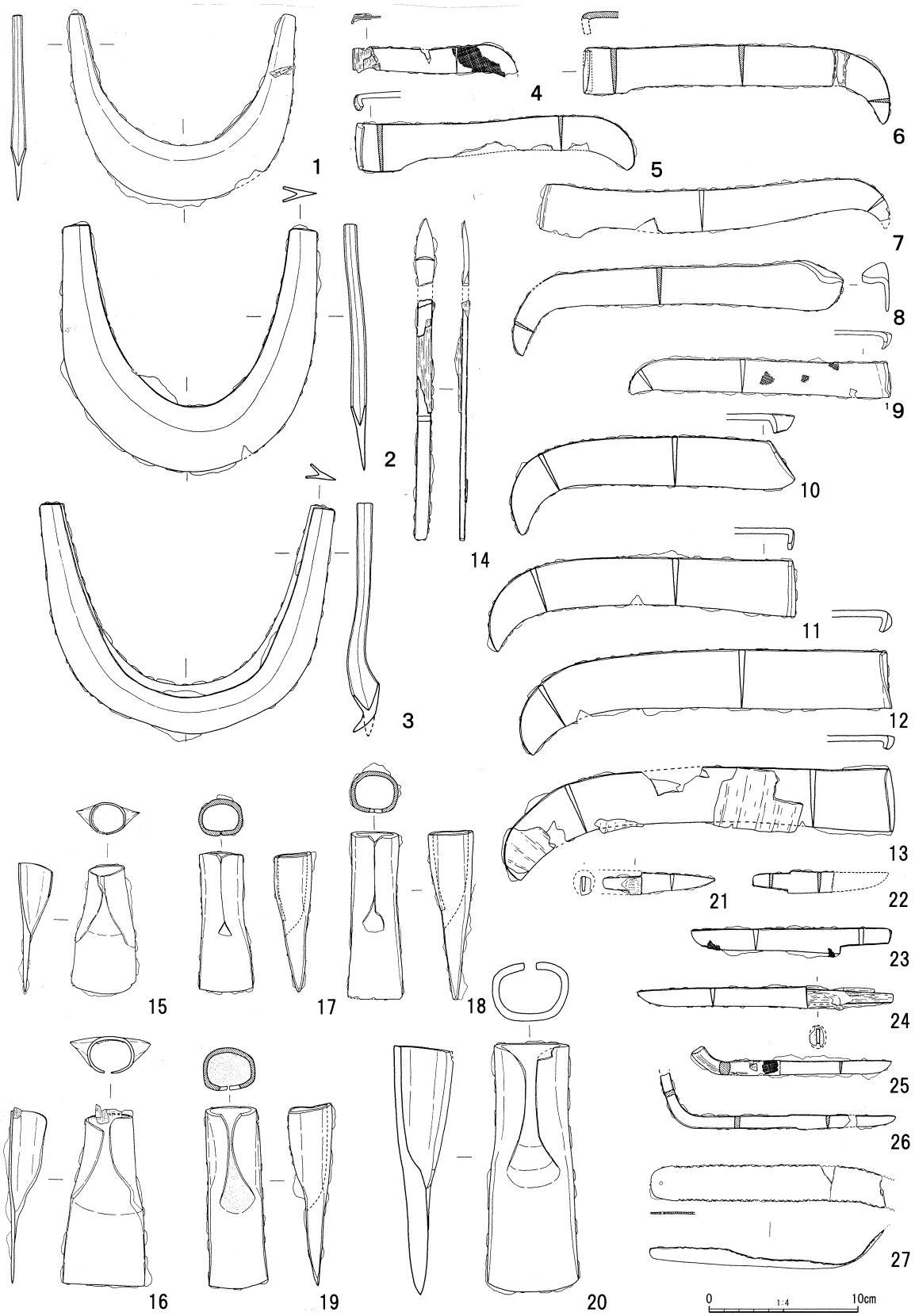
これまで、新原・奴山古墳群において、良好なセット関係を持つ鉄製工具が継続して副葬されていることを示してきた。そしてこれらが、鉇や鋸の機能変化を示す重要な資料であることを論じた。その変化は、斧や鑿における主要型式の変化にも連動しており、五世紀末の鉄製工具の画期を構成する。その社会的意義について、最後に言及しておきたい。

比較対象となるのが、7期から9期にほぼ収まると考えられる、福岡県朝倉市古寺墳墓群（橋口編一九八二・一九八三）、池の上墳墓群（橋口編一九七九）（以下、古寺・池の上墳墓群と総称する）の資料である（第13図）。

古寺・池の上墳墓群は、陶質土器・初期須恵器など、数多くの渡来系統に属する副葬品が認められることで著名であり（朴天秀一九九五）、その点では新原・奴山古墳群と共通する。しかし、副葬された鉄製農具・工具の内容を比較すると、明確な差異が存在していることに気づく。

古寺・池の上墳墓群においては、U字形鍬鋤先や曲刃鎌Ⅰ組B・C型、Ⅱ組b型といった、渡来系統に属する新式の鉄製農具セットの副葬が多数を占める。鉄製工具は、鉄柄付刀子や無茎鋸など、注目すべき副葬例も含むものの、鉄製農具に比べ明らかに少数である。一方、新原・奴山古墳群では、有袋斧、有茎・有袋鑿、鉇、鋸といった工具のセットが主軸である。

このような鮮やかな対比をなす原因として、まず思い浮かぶのが、造墓



第 13 図　古寺・池の上墳墓群における鉄製農具・工具副葬例

1・4・15・16：古寺６号土壙墓　2・12・20・24：古寺 19 号土壙墓　3・10・11：古寺 17 号土壙墓　5：池の上D-7　6・17：池の上D-26　7：古寺１号土壙墓　8・19・26：池の上D-4　9・21：古寺７号土壙墓　13・23：古寺 14 号土壙墓　14：古寺９号土壙墓　18・22・25：池の上D-3　27：池の上 1 号墳４号主体

集団の階層の違いである。新原・奴山古墳群が、宗像地域さらにはより広域の首長墓が主体であることはすでに述べた。一方、古寺・池の上墳墓群については、地域首長の傘下にある渡来人集団の墓域との位置づけがなされている（高田二〇一四：一九五頁）。両者の造墓集団には、明らかに階層差が認められる。すなわち、上位集団が新式工具セットを積極的に副葬し、より下位の集団が新式農具セットを積極的に副葬するとの想定が成り立つ。

しかし、宗像地域では有茎鋸の副葬が10期以降も継続し、地域首長墓だけでなく同一群集墳での集中副葬も存在することを前章で示した。仮に、当初は上位集団のみに新式工具セットを副葬する傾向があったとしても、木工や造船に携わった工人集団の紐帯を示すものとして急速に変容していったことがうかがわれる。

これに対して、新式の鉄製農具セットは、8期から9期に列島の広い範囲に急速に拡散する。その内容を見ていくと、先にも触れた、兵庫県姫路市姫路宮山古墳第三主体（松本・加藤一九七三）といった地域首長墓へ副葬されると同時に、集落近辺での祭祀遺構にも供献される点で、大きな社会的広がりを呈している（魚津二〇二一b）。工具・農具の副葬志向の違いは、階層差だけでは捉えきれない複雑な様相を呈すると結論付けることができるだろう。

この複雑な様相を具体的に理解する上で有益なのが、北陸地方におけるU字形鍬鋤先副葬の拡散についての繰納民之の想定である。繰納は、甲冑副葬とも関連する形での「ある程度規制された流通構造」を見出した（繰納二〇二〇　二三一頁）。新式鉄製農具セットの副葬は、波及当初は階層表示の側面はあったとしても、その後は多面的な要因のもとで各地に受容されたものと考えられる。

一方、前章で示したように、五世紀末における鉄製工具編成の画期は、建築材あるいは船材の精密な製材と深い関連があると予測される。新原・奴山古墳群における新式鉄製工具セットの副葬は、ひとえに「海を舞台とした人間活動」の結実であった。本稿冒頭で示した「海を舞台とした人間活動」の四つの区分を参照するならば、新式鉄製工具セットをもたらしたのは「海上で繰り広げられた、人・もの・情報のやりとり」による新技術の導入である。そして、その技術導入は、「列島各地の海域で、あるいは列島をこえて渡海する形で実行される外交・軍事活動」と表裏一体であり、だからこそ、沖ノ島を望む海域に接して築造された「海の古墳」への新式鉄製工具セットの副葬が不可欠だったと言えよう。

おわりに

以上、五世紀末における鉄製工具編成の画期を示しつつ、「海の古墳」として新原・奴山古墳群が有する意義について鉄製工具副葬の側面から考察を試みた。本稿が、その目的をどこまで達成できたか、いささか心許ない。北部九州以外の類例も踏まえた広い視野を持つ諸賢の批判や検討を仰ぐとともに、木工技術が本来対象とする木器の様相も含め、さらなる資料精査を自らに課していきたい。

ただ、本稿で、中期後半の渡来系技術の定着過程で新式鉄製農具セットと新式工具セットとの間に副葬意義の差異が生じたこと、そして該期の社会構造の影響のもとで列島各地で変容していったことを示せた。これは、後期古墳における鉄製農具・工具副葬の地域性という課題（鈴木二〇一六）の解明の糸口になる、大きな収穫であった。

新原・奴山古墳群をはじめとする宗像地域の副葬資料は、五世紀末における鉄製工具の画期だけでなく、六世紀以降における列島社会の編成過程を解明する上でも重要な視座を与える。この指摘を本稿のむすびとしたい。

註

1 （西谷一九五九）では「鉄鎚（かなづち）」「鉄鉗（かなはし）」と表記されている。

2 本例は8期に属するとみなしているものの、農具を欠いている。本稿では時期幅をもたせておきたい。

3 短茎鉇より長茎鉇が後出するのが確実と考えたので、旧稿のⅡ群とⅢ群とを入れかえ、Ⅱ群（短茎鉇）Ⅲ群（長茎鉇）と順序を揃える。

4 第一章で引用したように、（古瀬一九九一）では、「四世紀後半から五世紀前半にかけて」が、古墳時代における工具の画期とされる。本稿の対象時期より前（4期から6期）であり、稿を改めて論じたい。

5 船材も含めたのは、新原・奴山古墳群など北部九州の該期の類例に、船材加工に必要な、穿孔性能が比較的高い有袋鑿が目立つためである。

6 有茎鋸副葬例の集中と造船との関連については、すでに的確な指摘がある（白木二〇一一、亀田二〇一三）。本稿では、鑿や鉇の型式構成も加えた、工具の「道具立て」の次元で先行研究を補強することができたと考える。

引用・参照文献

阿南翔悟　二〇一三　「九州出土鋸について」『福岡大学考古学論集』2　福岡大学考古学研究室　二六五―二七五頁

池ノ上宏（編）二〇〇一『新原・奴山古墳群Ⅱ』津屋崎町文化財調査報告書第一七集　津屋崎町教育委員会

伊藤　実　一九九三「日本古代の鋸」『考古論集』潮見浩先生退官記念論集 潮見浩先生退官記念事業会　五三五―五六一頁

井上光貞　一九八四　「古代沖の島の祭祀」『日本古代の王権と祭祀』　東京大学出版会　二〇八―二四五頁

魚津知克　二〇一五　「五條猫塚古墳に副葬された鉄製農工具の構成と要素」『五條猫塚古墳の研究』総括編　奈良国立博物館　三五一―三六四頁

魚津知克　二〇一七　『海の古墳』研究の意義、限界、展望」『史林』第一〇〇巻第一号　史学研究会　一七八―二一一頁

魚津知克　二〇一八　「漁具資料からみる古墳時代の生業様相、対外交渉、統治理念」『日韓交渉の考古学―古墳時代―』最終報告書論考編　「日韓交渉の考古学―古墳時代―」研究会　「韓日交渉の考古学―三国時代―」研究会　六九四―七〇七頁

魚津知克　二〇二〇　「鉄製農工具の分類と様式設定」『中期古墳研究の現状と課題Ⅳ』中国四国前方後円墳研究会第二三回研究集会発表要旨集・資料集成　中国四国前方後円墳研究会第二三回研究集会実行委員会　五一―六八頁

魚津知克　二〇二一ａ　「鉄製農具・工具研究史からみた古墳時代社会へのアプロー

チ」『昼飯の丘に集う』中井正幸さん還暦記念論集 中井正幸さんの還暦をお祝いする会 三三―四二頁
魚津知克 二〇二一 b「古墳時代祭祀遺構における鉄製農具供献の意義」『技と慧眼』塚本敏夫さん還暦記念論集事務局 六七―七八頁
魚津知克 二〇二三「後期古墳における鉄製農工具副葬の背景」『高山流水』赤澤徳明さん退職記念論集 赤澤徳明さん退職論集刊行委員会 三二五―三三四頁
鎌木義昌（ほか）一九六五 『長福寺裏山古墳群』 長福寺裏山古墳群・関戸廃寺跡調査推進委員会
亀田修一 二〇一三 「古代宗像の渡来人」『沖ノ島祭祀遺跡の再検討』「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告三 「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議 四三―六五頁
北野耕平 一九六四「野中アリ山古墳」『河内における古墳の調査』大阪大学文学部国史研究室研究報告第一冊 大阪大学文学部国史研究室
北野耕平（編）一九七六 『河内野中古墳の研究』大阪大学文学部国史研究室研究報告第二冊 大阪大学文学部国史研究室
近藤義郎（編）一九九一 『権現山51号墳』『権現山51号墳』刊行会
佐々木隆彦（編）二〇一三 『奴山正園古墳』福津市文化財調査報告書第六集 福津市教育委員会
嶋田光一 一九九一「櫨山古墳の再検討」『古文化談叢』児島隆人先生喜寿記念論集 児島隆人先生喜寿記念事業会 五〇七―五五八頁
白木英敏 二〇一一「宗像海人集団の動向」『学術研究集会 海の古墳を考える』海の古墳を考える会 七九―八七頁
末永雅雄・島田 曉・森浩一 一九五四 『和泉黄金塚古墳』日本考古学報告第五冊 綜藝舎
鈴木一有 二〇一六 「中原四号墳から出土した生産用具が提起する問題」『伝法中原古墳群』富士市埋蔵文化財調査報告第五九集 富士市教育委員会 二二一―二四八頁
繰納民之 二〇二〇 「考察―河田山古墳出土鉄製品の様相―」『河田山古墳群』小松市教育委員会 二一五―二三六頁
高田貫太 二〇一四 『古墳時代の日朝関係』 吉川弘文館
伊達宗泰（編）一九七七 『メスリ山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第三五冊 奈良県教育委員会
田中 謙 二〇一七 「木工具」『モノと技術の古代史』金属編 吉川弘文館 一三―五一頁
丹下昌之 一九九五 「古代遺跡出土鋸の研究」『民具研究』日本民具学会 一一〇―一一八頁
帝室博物館 一九四四 『正倉院御物図録』第一五
中屋克彦（ほか編）二〇一九 『小松市八日市地方遺跡』 石川県教育委員会
西谷眞治 一九五九 「農民の生活」『世界考古学大系』三 平凡社 五一―六六頁
西谷眞治・鎌木義昌 一九五九 『金蔵山古墳』倉敷考古館研究報告第一冊 倉敷考古館
野島 永 二〇〇九 『初期国家形成過程の鉄器文化』 雄山閣
朴天秀 一九九五 「渡来系文物からみた伽耶と倭における政治的変動」『待兼山論叢』第二九号 大阪大学文学部 五三―八四頁

橋口達也（編）一九七九『池の上墳墓群』甘木市文化財調査報告書第五集　甘木市教育委員会
橋口達也（編）一九八二『古寺墳墓群』甘木市文化財調査報告書第一四集　甘木市教育委員会
橋口達也（編）一九八三『古寺墳墓群Ⅱ』甘木市文化財調査報告書第一五集　甘木市教育委員会
橋口達也（編）一九八九『新原・奴山古墳群』津屋崎町文化財調査報告書第六集　津屋崎町教育委員会
原秀三郎（編）一九九五『遠江　堂山古墳』磐田市教育委員会
樋上　昇・田中　謙・鶴来航介　二〇一八「木製品からみた金属製工具の使用」『鉄器招来』石川県埋蔵文化財センター開館二〇周年記念講座当日資料　三七―四六頁
平井洸史　二〇二一「古墳時代鉄製工具の様式的展開」『古代吉備』第三二集　古代吉備研究会　四六―六六頁
古瀬清秀　一九七四「古墳時代鉄製工具の研究」『考古学雑誌』第六〇巻二号　日本考古学会　三一―五六頁
古瀬清秀　一九七七「古墳出土の鉇の形態的変遷とその役割」『考古論集』慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集　松崎寿和先生退官記念事業会　二五七―二七〇頁
古瀬清秀　一九九一「農工具」『古墳時代の研究』第八巻　古墳Ⅱ　副葬品　雄山閣出版　七一―九一頁
松本正信・加藤史郎　一九七三『宮山古墳第二次発掘調査概報』姫路市文化財調査報告Ⅳ　姫路市教育委員会
三木文雄・村井嵓雄一九五七『那須八幡塚』小川町古代文化研究会
森田喜久男　二〇〇九『日本古代の王権と山野河海』吉川弘文館
門田誠一（編）二〇〇一『園部岸ヶ前古墳群発掘調査報告書』佛教大学校地調査委員会
山口譲治・吉留秀敏・渡辺芳郎（編）一九八九『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第二〇九集　福岡市教育委員会
山田昌久　二〇一二「木工技術と森林利用」『木の考古学 出土木製品データベース』海青社　三二八―三三六頁

図面出典（キャプションにて記載したもの以外）

第3図　1～3、5～6、9～16（橋口編一九八九）を実見のうえ一部改変　／4・7～8　筆者実測（九州歴史資料館所蔵）

第6図　1・9　筆者実測（福津市教育委員会所蔵）／2～8、10～13（池ノ上編二〇〇一）を実見のうえ一部改変

第8図　1　加賀市教育委員会　一九七九『分校古墳発掘調査報告』／2　杉本　宏（編）一九九一『宇治二子山古墳発掘調査報告』宇治市文化財調査報告書第二冊　宇治市教育委員会／3　北野耕平一九六四「富田林真名井古墳」『河内における古墳の調査』大阪大学文学部国史研究室研究報告第一冊　大阪大学文学部国史研究室／4　鎌木義昌　一九六二「古墳時代」『岡山市史』古代篇　岡山市役所／5　（末永・島田・森　一九五四）／6　鎌木義昌（編）一九六五『随庵古墳』総社市教育委員会／7　（三木・村井　一九五七）

第9図　1　上田宏範・北野耕平・伊達宗泰・森　浩一　一九六二『大和二塚古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第二一冊　奈良県教育委員会／2　小野山

節・本村豪章一九八〇「上毛野・伊勢崎市恵下古墳出土のガラス玉と須恵器と馬具」『MUSEUM』三五七　東京国立博物館　四―三一頁／3　筆者実測（松山市考古館所蔵）

第10図　1・6・7　吉澤　悟・川畑　純・初村武寛（編）二〇一四『五條猫塚古墳の研究　報告編』　奈良国立博物館／2　（近藤一九九一）／3　加古川市教育委員会（編）一九九七『行者塚古墳発掘調査概報』加古川市文化財調査報告書一五　加古川市教育委員会／4　田井知二一九九七『千原台ニュータウン7』千葉県文化財センター調査報告第二九五集　千葉県文化財センター／5　多賀茂治二〇一三「ずえが谷古墳群の調査」『三釈迦山北麓遺跡群』兵庫県文化財調査報告第四五三冊／8　（北野一九六四）

第11図　1　毛利哲久（編）二〇〇〇『小正西古墳』穂波町文化財調査報告書第一二集　穂波町教育委員会　2～11渡辺　誠（編）一九九七『考古資料ソフテックス写真集』第六集　名古屋大学文学部考古学研究室／12～13梅原末治・小林行雄一九四一「園田村大塚山古墳とその遺物」『兵庫県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第一五輯　兵庫県　／14伊達宗泰（ほか）一九七二『烏土塚古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第二七冊　奈良県教育委員会

第13図　1・4・7・9、14～16、21　（橋口編一九八二）

2・3、10～13、23～24　（橋口編一九八三）

5～6、8、17～19、22、25～27　（橋口編一九七九）